

[課程一2]

審査の結果の要旨

氏名 小野敏嗣

本研究は、抗血栓薬服用者に対する消化管内視鏡検査時の適正使用に関する問題点を明らかにするために、単施設および多施設で現状調査を行ったものであり、下記の結果を得ている。

1. 消化管内視鏡検査被検者の約15%が抗血栓薬を服用していること、その約1/4がワルファリンを、その約2/3がアスピリンを服用中であることを明らかにした。また、服用者の背景疾患としては虚血性心疾患が最多であり、その他不整脈や脳血管障害などの血栓塞栓症のリスクが高い状態であることを明らかにした。
2. 内視鏡検査前の抗血栓薬休薬期間としてはほとんどの服用者が全く休薬をしないか、または一律7日間の休薬の上で内視鏡を施行されるという二極化傾向にあり、日本消化器内視鏡学会ガイドラインに示された休薬期間の遵守率が低いことを明らかにした。
3. 内視鏡検査前の休薬期間の指示は、日本消化器内視鏡学会ガイドラインを熟知した消化器科医からではなく、循環器科医や神経科医などの処方医からの指示が半数以上を占め、逆に内視鏡検査後の再開時期の指示は消化器科医からの指示がほとんどであることを明らかにした。
4. 抗血栓薬内服者の消化管内視鏡検査時の偶発症率は先行論文で報告されている消化管内視鏡検査時の偶発症率と比較して有意に高いとは言えず、また抗血栓薬内服者において内服を継続したまま組織生検や粘膜切除を施行された症例では重篤な出血性イベントを認めず、血栓塞栓症のイベントに比較して致死的な経過を辿ることが稀であることを明らかにした。

以上、本論文は本邦における抗血栓薬内服者に対する消化管内視鏡時の問題点を明確に示した。本研究はこれまで十分なデータのなかった抗血栓薬服用者に対する消化管内視鏡検査時の適正使用に関して新たな知見を加え、今後のガイドラインの確立に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。